九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

長崎市方言の動詞活用表

塚本, 明広

https://doi.org/10.15017/2332700

出版情報：文學研究. 75, pp.39-55, 1978-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

長崎市方言の動詞活用表[1]

塚　本　明　廣

本稿は筆者[2]の方言である長崎市方言の内，動詞活用の**内省資料**の提供を主目的とするが，その資料に基づいて，基底の動詞語幹形式に接尾辞が結合する際の音韻規則に関しても部分的に触れた。

活用表に挙げた１～９の活用形は，語幹の音形に影響を与える接尾辞結合を網羅することを念頭において，全く任意に選んだものであり，使用頻度との関連はない。活用形８は伝統的活用表との対照のために入れた（表１とp.53の活用形８に関する注記を参照）。

表１

活用形	接尾辞の意味	伝統的名称
1	～しない	未然形
2	～しよう	
3	～した	連用形
4	～している	
5	～できる	
6	～する	終止形
7	～するな	連体形
8	～すると	仮定形
9	～しろ	命令形

(1)　本稿は基本的な考え方から細部に至るまで終始早田輝洋先生の懇切な御助言と御指導を仰いだ。音韻規則に関して度々の組直しにも拘ず提案し得るような満足な結果を得なかったのは一重に筆者の浅学に帰す。他日を期したい。また中間報告の段階で松田伊作先生を初め，当研究室のメンバーである綾部裕子，陣内正敬，中村靖の各氏から貴重な御批判と御教示とを賜った。上記の方々に深く感謝申上げる。

(2)　筆者は1946年長崎市生れ。18歳までは同市を長期間離れたことはない。10歳の時，同市の南西部（立神）から北部（浦上）へ移った。記憶に残っているのは

接尾辞自体は本稿の主題ではないので，概略的な意味表示を与えるに留め，本題に関連しない限り詳述しない。接尾辞が単独の形式素から成る場合はともかく，語幹に数個の形式素が結合して用言結合体[3]をなす場合に，助動詞の音形は動詞活用と同じ音韻規則の適用を受けて生成されるので，煩雑さを避けるためと活用表の検討の便宜を考慮して，結合体のまま表示し，形式素への分析はほとんど行わなかった。要するに接尾辞の音形は // で囲まない限り基底形式ではない。

資　料

動詞は各活用形における語幹分節音の現れ方に従って表2のａ～ｆの型に分類できる。参考までに音調に関して有標の場合は基底形式に /ˈ/を付けたが，音調の有無は活用の型に影響しない。上段の諸例は［+音調］の動詞であり，下段の諸例は［−音調］の動詞である。表2の音形は簡略音声表記による最終形式である。ピッチの高まりは実線で示した。

表2[4]

	a	b	c	d	e	f
	+押	+呼	+買	+割	+着	+上
	/ˈos/	/ˈjob/	/ˈkaw/	/ˈwar/	/ˈki/	/ˈage/
1	osaN	jobaN	kawaN	waraN	kiraN	ageN
2	oso:	jobo:	kao:	waro:	kiro:	agu:

語彙における多少の違い程度である。18歳からは12年以上県外に居住している上，方言のみを用いる生活空間は帰省時の家庭内に限られているので，インフォーマントとして条件が悪い。活用表の空隙を埋める際も，類推によって立てた音形が逆に方言音形の鮮やかな記憶を換起する場合があった。同一の活用形に二種の音形が並存する時はぞんざいな音形を選んだ。より叮嚀な形は学校教育に負う標準語形の影響ではないと断言できないからである。

(3) 河野六郎　1955：「朝鮮語」『世界言語概説』下巻（東京，研究社）p. 399 f.

(4) 漢字の左肩の+は［+音調］を示す。語音調¯は音形の末尾では文音調の影響で下り調子＼になる。活用形5の接尾辞の音調 ˘ は平坦¯でも下り調子＼でもな

3	oʃita	jonda	ko:ta	watta	kita	ageta
4	oʃijo?	jobijo?	kaijo?	wajjo?	kijo?	agejo?
5	oʃiki?	jobiki?	kaiki?	wariki?	ki:ki?	ageki?
6	osu	jobu	kau	wa?	ki?	agu?
7	osuna	jobuna	kauna	wanna	kinna	agunna
8	oseba	jobeba	kaeba	wareba	kireba	ageroba
9	ose	jobe	kae	ware	kire	agero

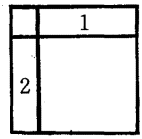
	a	b	c	d	e	f
	乾	書	縫	蹴	起	出
	/hos/	/kak/	/nuw/	/ker/	/oki/	/de/
1	hosaN	kakaN	nuwaN	keraN	okiraN	deN
2	hoso:	kako:	nuo:	kero:	okiro:	dzu
3	hoʃita	kaita	nu:ta	ketta	okita	deta
4	hoʃijo?	kakijo?	nuijo?	kejjo?	okijo?	dejo?
5	hoʃiki?	kakiki?	nuiki?	keriki?	okiki?	de:ki?
6	hosu	kaku	nu:	ke?	oki?	dzu?
7	hosuna	kakuna	nu:na	kenna	okinna	dzunna
8	hoseba	kakeba	nueba	kereba	okireba	deroba
9	hose	kake	nue	kere	okire	dero

上記a～fの各型にはそれぞれ表3の動詞が属する。語幹が一音節の動詞を主に挙げた。

く，どちらかというと上り調子に近いがそれほど明瞭ではない。音調に関しては付記を参照されよ。活用形2の長音は繰返す際に任意に又は完全に短音化する(osōosò '押そう押そう'，kaōkaò '買おう買おう')。ただし3cが完全に短音化することはない（*kotakota)。c 6，7も短音とならない（*nu，*nuna)。

表 3[5]

表 3 の見方

a./3/ 

1：語幹頭子音

2：語幹母音

3：語幹末子音

1 + 2 + 3 = 語幹

a～f：活用の型

+：[+音調]　　C：子音

( )：稀な語彙　　V：母音

a. /s/

		k	s	t	h	m	d	その他
a		+貸	刺, 指	+足		(増)	出	/hujas/ 増, /nokos/ 残
i								/'mojas/+燃, /otos/ 落
u					(伏)	(蒸)		/nagas/ 流, /modos/ 戻
e		+消						/utus/ 移, 写
o	+押	+越		±吐	乾			/kajas/ 返

b. /k/

		k	s	t	n	h	m	j	w	d
a	+開, ±飽	書	咲	+炊	+泣	吐	+巻, ±撤	+焼	+湧	+抱
i		+聞, +効	+敷			+引				
u	+浮		好	着	+抜	吹	+剝, 向			
e			塞							
o	+置			解	+退					+退

その他

/kawak/ 乾, /hawak/ 掃, /'migak/+磨, /aruk/ 歩, /igok/ 動

(5) 漢字の左肩に±とあるものは音調の有無に関し遙れが見られるもの。「飽」はb型とe型があるがb型が優勢。「切」の活用形5には ki : ki? '切れる（能力）' という音形もある。

b. /t/

		k	t	m
a		勝	立	待
i				
u	打			
e				
o				持

b. /n/ /sin/死のみ。

b. /m/

		k	s	t	n	h	m	j
a	編	噛						+止
i								
u	産, 膿	組	住, 清	+積		+踏		
e								
o		混	+染		飲		+揉	読

b. /g/

	k	s	t	n	h
a	嗅			(和)	剝
i					
u			+注	脱	
e					
o	漕	削	研		

b. /b/

	t	j
a		
i		
u		
e		
o	+飛	+呼

その他

/'narab/ +並

/'asob/ +遊

/'korob/ +転

c. /w/

		k	s	n	h	m	j
a	会	+買, 飼		綯	這	回 眩	
i	+言						
u		食	+吸	縫			+言, 結
e							
o	+追	(乞)	沿				酔

d. /r/

		k	s	t	n	h	m	j	w
a		+借		+足	+鳴, 生	+張		+遣	+割
i	+要	切	+知	+散		干	満		
u	+売		擦	+釣	+塗	+振		+揺	
e		蹴		照	練	+減		選	
o	+居	凝	剃	取	+乗	掘	漏	+寄	

e.

	k	n	m
i	+着	+似, 煮	見

その他

/oki/ 起, /iki/ 生

f. 1. /-C_1e/(C_1 ≠ j) の動詞

	n	d
e	+寝	出

その他

/'age/ +上, /sage/ 下, /same/ 冷,

/nagame/ 眺, /home/ 褒

f. 2. /-Vje/ の動詞

		k	s	t	n	h	m
a	+零	+代	+冴	+耐	(萎)	生	
i		+消			+煮	冷	見
u	+植	朽	+据			増	
e							
o	+終	+越, 肥	+添			吠	+燃

少数の動詞はふたつの活用型を持つ（表4）。/mi/のf型は普通は特定の用法，所謂「補助動詞」としての用法，に限られる。即ち，misetemu :ka ‘見せて見ようか’，miseteminne ‘見せて見なさい’，misetemiro ‘見せて見ろ’ など(6)。

表4

	+滅		綻		見	
	b e		b e		e f	
	/'horob/	/'horobi/	/hokorob/	/hokorobi/	/mi/	
1	horobaN	horobiraN	hokorobaN	hokorobiraN	miraN	miN
2	horobo:	horobiro:	———	———	miro:	mu:
3	horonda	horobita	hokoronda	hokorobita	mita	
4	horobijo?		hokorobijo?		mijo?	
5	horobiki?		———		mi:ki?	
6	horobu	horobi?	hokorobu	hokorobi?	mi?	mu?
7	horobuna	horobinna	hokorobuna	hokorobinna	minna	munna
8	horobeba	horobireba	hokorobeba	hokorobireba	mireba	miroba
9	horobe	horobire	hokorobe	hokorobire	mire	miro

(6) 文音調の表記は省略する。

	干[7]		+引
	e	d	b
	/hi/	/hir/	/hik/
1	çiN	çiraN	çikaN
2	——	——	çiko:
3	çita	çitta	çi:ta
4	çijo?	çijjo?	çikijo?
5	——	——	çikiki?
6	çi?	çi?	çiku
7	çinna	çinna	çikuna
8	çireba	çireba	çikeba
9	çire	çire	çike

不規則動詞は，「来」を除き，ふたつの型に跨って活用する。又はふたつの型を相補分布的に用いる活用型と言える（表5)。

表 5[8]

	有	+行	来	+為
	/ar/	/'ik/		/'si～'su/
1	(naka)	ikaN	koN	seN
2	——	iko:	ku:	su:
3	atta	!itta	kita	ʃita
4	arijo?	ikijo?	kijo?	ʃijo?
5	——	ikiki?	ki:ki?	ʃi:ki?

(7) '潮が干る' の意味で潮ノ引クを用いる。e 型の「干」「満」は筆者は用いないが，活用表の内の幾つかの音形は耳にしたことがある。

(8) 来，為の 活用形 8 には kureba '来ると'，sureba 'すると' という音形もある。sereba は筆者には他方言（の影響）と感じられる。有は d 型の欠損動詞である。

6	aˀ	iku	kuˀ	suˀ
7	anna	ikuna	kunna	sunna
8	areba	ikeba	koiba	seroba
9	are	ike	koi	sero

因みに各活用形に用いられる接尾辞の諸例を表6に掲げる。

表6

活用形	代表的接尾辞(表2)	その他の例
1	/an/ ～しない	(r)amba～しないと，(r)amba さあ～しよう， (s)asuˀ，(r)asuˀ ～させる，(r)aruˀ ～される
2	/ou/ ～しよう	(r)o:de ～u:de (r)o:i ～u:i ～しようよ
3	/ta/ ～した	taka ～したい，tara ～したら，tari ～したり， te ～して，toˀ ～してある，している， toku ～しておく
4	joˀ ～している	juˀ ～できる，nasai ～しなさい， nagara ～しながら
5	kiˀ ～できる	masu ～します，/i/｛名詞化｝，/mo/も，/wa/は
6	/ru/ ～する	
7	/ru/＋na ～するな	/ru/＋goto ～するように， /ru/＋名詞，/ru/＋助詞
8	(r)eba roba ～すると	
9	(r)e ro ～しろ	

活用表についての注記

［＋音調］は頭から第二モーラ目のピッチの高まりとして実現される。ただし第二モーラ目が促音便の場合（3d）だけは第三モーラ目つまり第二音節目に移る。例えば jonda (3b) '呼んだ'，waraN (1d) '割らない'，waramba (1d) '割らないと'，watta (3d) '割った'。

活用形３は「音便形」が現れる活用形である。音便現象はｂ～ｄの語幹末分節音が子音である子音語幹の動詞にのみ見られる（表7)。表７を整理すると表８となる。

表７

活用型	幹末子音	[＋音調]	[－音調]
a	/-s/	oʃ̄ita 押	hoʃita 乾
b	/-k/	naīta 泣	kaita 書
		nodz̄oita 除	
	/-t/	――――	katta 勝
	/-n/	ʃ̄inda 死	――――
	/-m/	j̄anda 止	jonda 読
		kagànda 屈	
	/-g/	tsuīda 注	toida 研
	/-b/	j̄onda 呼	――――
		asònda 遊	
c	/-w/	k̄o:ta 買	ko:ta 飼
		utò:ta 歌	
d	/-r/	wattà 割	ketta 蹴
		kaw̄atta 変	

表８

幹末分節音	[ ] 内は接辞の前の実現形				/t/で始まる接辞
//内は動詞語	/s/ [ʃi]	/k/ [i]	/w/ [*]	/r/, /t/ [t]	[t]
		/g/ [i]	/b/, /m/, /n/ [n]		[d]

イ音便　上段左：ウ音便
上段右：促音便
下段：撥音便

＊：最終形式は
/aw/→ o:
/uw/→ u:
/ow/→ o:

活用形 4d で waījoʔ ではなく w̄ajjoʔ としたのは同じ活用形に属する w̄annasai ‘割りなさい’（表６参照）に/r/の同化現象が見られるからであるが，解釈次第では waījoʔ となろう。

活用形４，５，６に実現される分節音ʔ は音節末で弁別的であり，機能負担量が大きい。表９に示したような最小対立をなす音形の対がある。（自）は自動詞を（他）は他動詞を意味する。これらの ʔ はより叮嚀な音形では ru と実現する。例えば warījoru (4d) ‘割っている’，warīkirǔ (5d) ‘割ることができる’，warù (6d) ‘割る’。ただし aḡuru (6f) ‘上げる’，saguru (6f) ‘下げる’ は稀である。

表 9

aku ⁺開（自）
aku? ⁺開（他）

kaku 書
kaku? 掛

tatsu 立（自）
tatsu? 立（他）

tsuku 着，搗
tsuku? 作

toku 解（他）
toku? 解（自）

nuku ⁺抜（他）
nuku? ⁺抜（自）

noku
noku?

doku ⁺退（自）
doku? ⁺退（他）

maku ⁺巻
maku? ⁺負

muku 向（自）
muku? 向（他）

muku ⁺剝（他）
muku?⁺剝（自）

jaku ⁺焼（他）
jaku? ⁺焼（自）

活用型3，4，5はd～f型において次の三特徴に関して互いに異なっている。①語幹末分節音/r/が同化（wajjo? の場合）又は消去（waijo?）されるか。②［－音調］の動詞語幹にピッチの高まりが現れるか。③語幹末の母音分節音が延長されるか。同じく「連用形」に接続する ju? '～できる' を加えた活用表（表10）を参照されたい。表10の上段は語幹が一音節の動詞，下段は多音節語幹の動詞である。

表10

	d		e		f	
	⁺割	蹴	⁺着	見	⁺寝	出
	/ˈwar/	/ker/	/ˈki/	/mi/	/ˈne/	/de/
3	watta	ketta	kita	mita	neta	deta
4	wajjo?	kejjo?	kijo?	mijo?	nejo?	dejo?
4′	waiju?	keiju?	ki:ju?	mi:ju?	ne:ju?	de:ju?
5	wariki?	keriki?	ki:ki?	mi:ki?	ne:ki?	de:ki?

	d		e		f	
	⁺踊	戻	⁺感	起	⁺上	下
	/ˈodor/	/modor/	/ˈkandi/	/oki/	/ˈage/	/sage/

3	odotta	modotta	kandʒita	okita	ageta	sageta
4	odojjo?	modojjo?	kandʒijo?	okijo?	agejo?	sagejo?
4′	odoiju?	modoiju?	kandʒiju?	okiju?	ageju?	sageju?
5	odoriki?	modoriki?	kandʒiki?	okiki?	ageki?	sageki?

表10から特徴①と②に関しては動詞語幹の音節数も［＋音調］の有無も非関与的であることが明らかである。つまりd～f型における3～5の活用形の違いは，語幹末母音の延長（特徴③）を除くと，接辞要素自体の特性に因る。これら四つの接辞要素は語としての独立度（特徴④）も異なっている。特徴④が特徴③の現象と関係が深いことについてはp.51f.で後述する。今は次の諸例（文音調は省略）を参照されよ。

ta
- tatʃi mo ʃitaʃi suwari mo ʃita　'立ちも座りもした'
- *tatʃi mo taʃi suwari mo ta　————————

jo?
- jomi mo ʃijoʃʃi kaki mo ʃijo?　'読みも書きもしている'
- *jomi mo joʃʃi kaki mo jo?　————————

{ju? / ki?}
- jomi mo ʃi:kiʃʃi kaki mo ʃi:ju?　'読むことも書くこともできる'
- jomi mo kiʃʃi kaki mo ju?　' 〃 '

- tatʃi mo ʃi:kiraNʃi suwari mo ʃi:jeN　'立つことも座ることもできない'
- tatʃi mo kiraNʃi suwari mo jeN　' 〃 '

ju?, ki? の二対の例で，各対の初めの例は文法的ではあるが余剰性又は動詞語幹の名詞化が感じられる。各対の後の方の例は文法的であり異和感は全くない。以上の四特徴に関する対照表が表11である。

表11

接辞要素	①/r/の同化／消去	②[－音調]→[＋音調]	③幹母音延長	④独立度
ta	＋／－	－	－	弱
joˀ	＋／＋	－	－	弱
juˀ	＋／＋	＋	＋	強
kiˀ	－／－	＋	＋	強

活用形９の｛命令｝は頻度が低く，普通は他の形式素結合で表現する。例えば kakanne[6], kakaŋka, kakamba など。このことは後述の活用形８に関する注記と無関係ではないかも知れない。このように使用頻度が少いことが原因なのか，ｅ型に属する語彙の少いことが原因なのか，それとも脚注（２）で述べた筆者の個人的事情が原因なのか分らないが，８ｅの音形は確信が持てない。/ｍｉ/のｆ型（表４）の存在も一因かも知れない。

音韻規則に関する部分的考察

活用形１において否定接辞の基底形式は/ an /又は/ ran /と想定される。/ ran /とする場合は１ｆで ra という二分節音の消去規則が必要となり不自然である。したがって基底形式は/ an /とし,１ｅでｒ挿入規則を立てる。

活用形２ｅにおいても上述と同じ理由でｒ挿入とする。

活用形４および表10の活用形４′においては語幹末子音ｒが同化（$\overline{\text{wajjo}}$ˀ, $\overline{\text{wajju}}$ˀ の場合）又は消去（wa$\bar{\text{i}}$joˀ, wa$\bar{\text{i}}$juˀ の場合）される。これは両者に共通の音韻環境，—j ～ —ij, に因るのであろう。

活用形５は表10, 11の特徴④に関連するが（p. 50），ｅ型ｆ型の動詞に juˀ と kiˀ が接続する時，多音節語幹の動詞と異なり，一音節語幹の動詞は語幹末母音を延長する。一見すると接辞との結合によるピッチの高まりの随伴現象とも考えられるが，名詞においても，［＋音調］

の有無にも接辞の有無にも関りなく一音節語の母音延長が見られるので（表12），むしろ juʔ と kiʔ の語としての独立度の高さ（特徴④），換言すると語幹と接辞要素との結合度の緩さ，その結果としての語幹の独立度の高さが主要原因なのかも知れない。

表12

	独立形	～を	～から
葉	hà:	ha:ba	ha:kara
歯	ha:	ha:ba	ha:kara
血	tʃi:	tʃi:ba	tʃi:kara
木	ki:	ki:ba	ki:kara
麩	Φu:	Φu:ba	Φu:kara
酢	su:	su:ba	su:kara
柄	e:	e:ba	e:kara
絵	e:	e:ba	e:kara
戸	to:	to:ba	to:kara
「の」	no:	no:ba	no: kara

juʔ と kiʔ がｒ同化又は消去に関しｄ型で異なる振舞をするのは，接辞要素の結合度の緩さにも幅があるため，又は結合度の違い以上に前項のｒ同化又は消去規則の作用が強いためと解釈し得る。更に音調の実現の違いも考慮すると活用形4, 4′（表10），5の接尾辞の基底形式を，一律に，iを頭音として持つ/ijor/, /ije/～/ie/, /ikir/ とすることも /i/＋/or/, /i/＋/e/, /i/＋/kir/ とすること（即ち境界要素を同一とすること）も問題がある。助動詞の分析の際にも考慮すべき事柄である。

活用形４，６，７に見られるｒの消去又は同化現象（次項も参照）が同じ音韻環境にあっても名詞に見られないこと（表13）も上述のことと無関係とは思えない。用言に較べて体言の独立性が強いこと(10)の反映ではないだろうか。

活用形６ではａ～ｃ型の活用形から接辞の基底形式が/u/を持つことは明らかであり，更にｄ型との比較から ru→r→ʔ の派生が考えられる。これに活用型３，７を加えて考察するとｒは直後に子音が続く時はその子音に同化され，それ以外の時は ʔ と実現するという音韻規則

(9) 長母音は任意に短母音化する。

(10) 河野六郎　1971：「朝鮮語の膠着性について」『言語学論叢』vol. 11 p .52（東京教育大学言語学研究会）

表13

	独立形	～を	～から
+蟻	ari	aribа	arikara
#百合	juri	juribа	jurikara
+鳥	tori	toribа	torikara
針	hari	hariba	harikara
錐	kiri	kiriba	kirikara
瓜	uri	uriba	urikara
+丸	maru	maruba	marukara
+汁	ʃiru	ʃiruba	ʃirukara
+鶴	tsuru	tsuruba	tsurukara
猿	saru	saruba	sarukara
春	haru	haruba	harukara
ネル	neru	neruba	nerukara

その他の語彙	
+氷	koːri
+ブリキ	buriki
+鳥黐	torimotʃi
折紙	origami
薬	kusuri
御釣	otsuri
+車	kuruma
+鰯	surume
+丸太ん	maruta
樽	taru
家鴨	açiru
昼寝	çirune

を立てることができる。この音韻規則によって母音間に生じた？は，ぞんざいな発音では消去されて直前の母音を代償延長する。その派生の一例を示すと次のようになる。karuate→kaʔate→kaː ate‘借りる当’ keruaite→keʔaite→keː aite‘蹴る相手’。e型f型の活用形6，7を説明するためにも基底形式は/ru/とすべきであろう。

活用形7は前項の考察から，活用形6に更に形式素が接続したものと考えられる。より叮嚀な音形としてd型に waruna がある。

活用形8は活用形9に形式素 ba が接続したと解釈した方が文法が簡潔になるかも知れない。このことは表2と表5の活用形8と9を比較すると明らかである。特に表5における活用形8の koiba‘来ると’の存在。更に活用形1に ba を接続した osamba‘押さないと’，

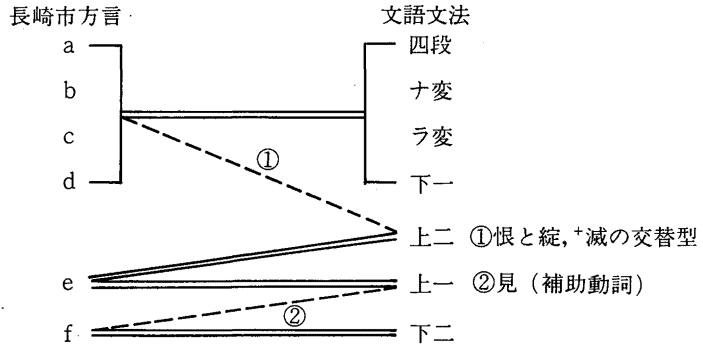
kiramba‘切らないと’, agemba‘上げないと’, semba‘しないと’, komba ‘来ないと’等の amba‘～しないと’という文法的形式が存在する。tara ‘～したら’, nara‘～なら’にそれぞれ ba を接続した taraba, naraba は ba を接続しない形式に較べ筆者には余剰性が感じられる。ただしamba には‘さあ～しよう’の意の接尾辞があるので（例えば osamba‘さあ押そう’, sagemba‘さあ下げよう’, semba‘さあやろう’），接尾辞の総合的分析が必要である。しかし少くとも活用形8と9を同一の活用形の許に統合することは許されよう。

結　論

長崎市方言の規則動詞は子音語幹動詞（a～d型）と母音語幹動詞（e，f型）とに大別できる。後者の内e型（即ち語幹末がiで終る型）はd型（即ち語幹末がrで終る型）への類推が著しく，母音語幹が顕わなのは「連用形」のみである。d型は逆に「連用形」の一部で語幹のrの同化又は消去が見られe型に似た音形を示す。総じてrの挿入，同化，消去といった現象が著しい。f型（即ち語幹母音eで終る型）は語幹母音の交替が特徴的である。

最後に長崎市方言の活用型と文語文法の活用型の対応表（表14）を挙げる。

表14



参照文献

(本稿では充分に活用できなかったが音韻規則の考察の際に下記を参照した。)
早田輝洋　1966：「東京方言の音韻化規則」『言語研究』49, pp. 55～69.
――――　1977：「生成アクセント論」『岩波講座日本語5音韻』pp. 323-360.
黒田成幸　1968：「促音及び撥音について」『言語研究』50, pp. 85-98.
MAC CAWLEY, J. D.　1968：The Phonological Component of a Grammar of Japanese, Mouton.

［付記］

長崎市方言の音調においては何が関与的であるかを知るために，分節音を同じくするが音調の有無を異にするふたつの語彙（「⁺着」）と「切」）を用いて，モーラ単位で可能な限りのピッチの高低の組合せを与えられた場合いずれの語彙と認定するかを試した。その結果表15のようになった。Mはモーラ。

表15

活用形 / ピッチ型	1 kiraN	7 kinna	8 kireba
①M̄M̄M̄	切	切	切
②M̄M̄M	着	着	着
③M̄MM̄	(着)	(着)	(着)
④MM̄M̄	(切)	(切)	(切)
⑤M̄MM	——	——	——
⑥MM̄M	着	着	着
⑦MMM̄	(切)	(切)	(切)
⑧MMM	切	切	切

(　)内は特殊な文音調が加わったものとして認定される。即ち1③は囃す調子。7③は強く言い含める調子。④は断言的に調音する際のピッチ型。1⑦は無関係を装う調子。7⑦は最後のモーラのピッチが下り調子の時に｛勧め｝の意味を担う。ピッチ型が無標のもの（即ち特殊な文音調を担わず語音調のみを担うもの）として認識される②，⑥（「＋着」）と①，⑧（「切」）との比較から，長崎市方言では，少くとも，第一モーラのピッチの高低は音調の有標性の弁別に関して非関与的であると言えよう。tonda ‘飛んだ’，ko:ta ‘買った’，wajjo? ‘割っている’などの例から第二モーラ目の高いピッチ（最終形式ではそのモーラを含む音節のピッチの高まりとして実現される）が［＋音調］に関与的である，と結論するためには watta ‘割った’ を説明する規則が必要である。　（1977. 11. 7）